

第七十二話 切なくもあり悲しくもあり、特攻兵器

特攻兵器とは、戦死を前提とした特攻を目的として発明、もしくは既存の兵器を改装した兵器である。特攻兵器には「必死」前提の兵器のみではなく、「決死」の兵器の中にも事実上の特攻兵器が存在すると云われる。

1 陸海軍の特攻兵器開発経緯

日本の陸海軍では、劣勢となった大東亜戦争末期に戦局を打開するため、体当たり攻撃、自爆攻撃を水中、空中で行う特攻兵器が開発された。

陸軍では、1944年春、四式重爆撃機と99式双発軽爆撃機を改修して特攻兵器にすることを決定、1944年5月、体当たり爆弾桜弾の開発のため、特別研究班を設置

サイパン陥落後、開発が促進され、四式重爆撃機「飛龍」と九九式双発軽爆撃機の体当たり機への改修に着手する。1944年9月5日、陸海民の科学技術の一体化を図るため、陸海技術運用委員会が設置され、研究の一つに「桜弾」も含まれていた。

1945年1月20日、航空特攻兵器「剣」の試作研究、1945年（昭和20年）2月、「夕号」の試作研究が開始された。

海軍は、1943年、既に一部で特攻兵器に関する声が上がっていた（城大佐、黒島連合艦隊参謀等）特攻兵器の開発は1944年2月のマーシャルの陥落、トラック島空襲をきっかけとして、人間魚雷の試作命令（1944年2月26日）から始まるが、結局実現はしなかった。

1944年4月4日、黒島亀人軍令部二部長が「作戦上急速実現を要望する兵力」を提出する。体当たり戦闘機、装甲爆破艇（震洋）、大威力魚雷（回天）の特攻兵器を含んだ提案であった。軍令部はそれを検討した後、震洋、回天、海龍の水中特攻兵器の緊急実験を海軍省側に要望した。艦政本部は仮名称を付して担当主務部を定め、特殊緊急実験を開始する。海軍省に奇襲兵器促進班を設けた。

爾後、「回天」の採用確定、「桜花」の試作研究決定、「海軍省特攻部発足」

「1945年7月、ラムジェットを搭載の特攻機の「梅花」の試作研究」等と続く。

2 専用兵器（改修兵器は割愛）

- (1) 水中 回天（人間魚雷） 海龍（特殊潜航艇） 伏龍（人間機雷）
- (2) 水上 震洋（爆装特攻艇） マルレ（四式肉薄攻撃艇）
- (3) 空中 桜花 梅花 剣 神龍 桜弾（体当たり爆弾） 夕号



回天



海龍



伏龍



震洋



マルレ



桜花



梅花



剣



神龍



桜弾



夕号

究極の人命軽視の兵器、統率の外道だと批判・非難は易いが、已むに已まれぬ切なさ、悲しさをも感じる自分があるのも事実だ。